3

イセリア英雄戦記

the legend of the Heroes war

立ち読み版

編集 二次元ドリームマガジン編集部

挿絵 牡丹

第9話　頽廃のアヴァルス――本文担当：斐芝嘉和　007
第10話　魔眼姫――本文担当：栗栖ティナ　057
第11話　淫辱のノイル砦――本文担当：夜士郎　113
第12話　乳堕の姫君――本文担当：089タロー　173
Bonus Track　223

登場人物紹介

Characters

セリーヌ=アヴァリアレス

イセリア英雄公国の騎士。外交も任され、皇女からは絶大な信頼を与っている。お菓子作りが趣味という可愛らしい一面も。

フィオナ=ブリティッシュ

イセリア英雄公国の皇女。少し世間知らずなところがあるが、幼馴染みのセリーヌのことをとても大切に想っている。

リア

イセリア諜報部隊「クロウ」に所属する暗殺者。仲間の前では無邪気な姿を見せる。

アリオナ=ブリティッシュ

イセリア英雄公国の現女王であり、フィオナの母親。メイズの瘴気にあてられていたため、病に臥せっていた。

エルス=M(マイハ)=アムデルト

イセリアの第三騎士団団長を務める貴族令嬢。聖なる槍《セルフェザー》と特殊能力《マイハ反応》を使う。

レーシア=スカール

第三騎士団の副団長を務める少女。エルスを「お姉様」と慕っている。

ギュスターヴ

バーンドベルグ帝国の皇帝。元は宰相だったが、前皇帝が没した際に事後を任され、皇帝の座に就いた。ギュスターヴというのは通り名で、本名はベリアルド=オーギュスタン。

ウォルガード=オーギュスタン

バーンドベルグ帝国の将軍。傲岸不遜な性格ながらも、戦いにおいては真摯で、正々堂々真正面から勝って蹂躙するのを好む。オーギュスタン家の嫡子。

メイベルローゼ=オーギュスタン

バーンドベルグ帝国の皇帝ギュスターヴの末姫。あらゆる者の意識はそのままに、肉体を思うままに操れる『服従魔眼』を持つ。

メイヴェン=ネルクバイル

滅びの都アヴァルスに館を構える、吸血鬼にして凄腕の死霊使い。『真祖』と呼ばれる存在で、絶大な魔力で様々な秘術や禁呪を使う。

氷継(ヒツギ)

フェイエン王家に仕える女執事。アイマスクをつけているが、気の流れを読み取る「心眼」で外界の状況を察している。

マリイン=ルウ

クアール大同盟で水生生物学を研究している学者。湖に巣食うタコ怪物との戦いに備え、フィオナの乗る船に同乗する。

イセリア英雄戦記とは？

二次元ドリームマガジン史上初の超長期連載＆読者参加型のリレー小説！

読者の参加によって物語が展開する。

A. ○○ルート
B. △△ルート

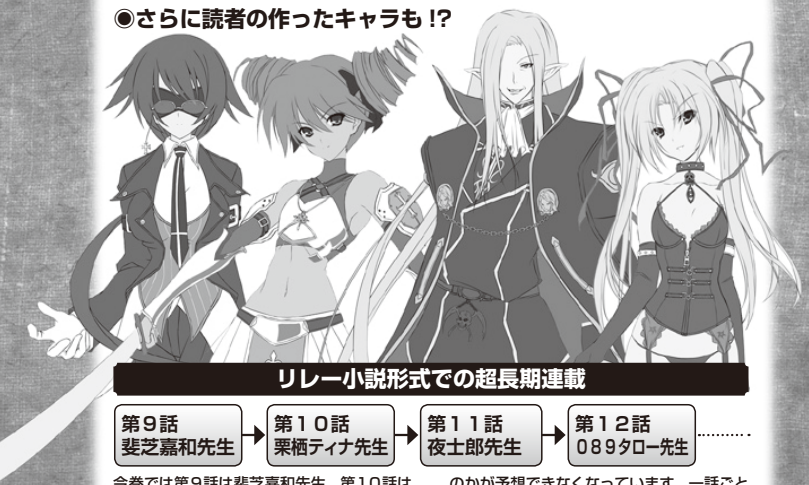
読者の投票で展開が変化！

A. ○○ルート
B. △△ルート

雑誌連載時には、本文中に選択肢が設けられています。アンケートハガキで「どちらが読みたいか」を投票していただき、より多くの支持を受けた選択肢に沿って物語が展開していきます。また、外伝小説やオリジナルキャラクターを投稿することで、読者の皆さまで『イセリア英雄戦記』を作る楽しみを味わってください。

※選択肢は雑誌掲載版のみで、単行本では選択肢は削られています。ご了承ください。

◉さらに読者の作ったキャラも！?



リレー小説形式での超長期連載

第９話 斐芝嘉和先生 → 第１０話 栗栖ティナ先生 → 第１１話 夜士郎先生 → 第１２話 ０８９タロー先生 ……

今巻では第９話は斐芝嘉和先生、第１０話は栗栖ティナ先生、第１１話は夜士郎先生、第１２話は０８９タロー先生と、１話ごとに本文を執筆する作家が変わります。また、連載回数が２５回(2013年4月現在)を超える超長期連載によって、ヒロインたちがいつ堕ちるのかが予想できなくなっています。一話ごとに雰囲気が変わる文章や、いつ堕ちるかわからない緊迫感をお楽しみください。

※本作品の世界観および設定は、竹内けん先生に作っていただいたものをもとに、本編を執筆いただいた各作家さんと読者の皆様の意見で構成されております。

公式サイトでさらに楽しく！

読者による投稿小説や投稿キャラクターが公開されている公式サイトでさらに『イセリア英雄戦記』を楽しめます。登場キャラクターのスリーサイズや国の設定などもまとめられており、現在行っている人気キャラクター投票などのWebコンテンツも今後、他のコンテンツを追加予定です。

『イセリア英雄戦記』公式サイト　http://ktcom.jp/icerya/

イセリア英雄戦記

The Legend of the Heroes war

第9話

頽廃のアヴァルス

著：斐芝嘉和

「くっ……み、皆さん。わたくしのここを……どうぞ……使って……その……」
胸が張り裂けそうな羞恥を耐え、必死に搾り出した声。だが、すぐ横から咎められた。
「そんな誘い方で使ってもらえると思うの、フィオナ姫！　もっといやらしく下品に、牝豚らしく叫ぶのよ！　ケツマンコを使って欲しいんでしょう？」
「くっ、わたくしの……お尻……ケ、ケツマンコを……使ってください」
「まだまだ足りないわ！　ケツマンコで、皆さんのチンポをいやらしく扱かせてくださいとはっきり言いなさい。淫らではしたない牝豚姫らしく‼　アハハハッ！」
「わ、わかりました……ケ、ケツマンコでぇ……チンポを扱きます！　みなさんのチンポをいやらしく扱かせてください‼　うぅっ……」
うながされるまま口にした、下品な言葉。男たちから歓声が、女騎士たちからは悲痛な叫びが、一斉にあがる。
「おい、聞いたか？　今の言葉！」
「聖女と言われるイセリアの姫がこんな下品な言葉を叫ぶなんて、最高だぁ！」
「きしゃまりゃぁ……姫様を愚弄する……んぐっ、あぁっ、はぁんっ！」
嘲笑う男たちの声と、未だ入れ替わり立ち替わりの小水責めに遭いながら、それに噛みつくツインテールの騎士。早くも羞恥で心が折れそうになっていた金髪姫は、その姿を見て気持ちを奮い立たせ、茹だるように赤く染まった顔を上げて力強く叫んだ。
「さあ、他の皆さんではなく……わ、わたくしのケツマンコを使って‼　みなさんのチン

ポはすべてここで……ケツマンコで扱きます！　だから……」
「アハハハハハァッ！　いいわ、最高よ‼　あのフィオナ姫が、こんなゲスな男たちに自分からお尻を差し出すなんて！　……ほら、そこのお前！」
興奮を抑えきれなくなったのか、再びボンデージの中へ手を差し込み、自らの小ぶりな乳房を掴むメイベルローゼが、傍にいたひとりの男を招く。
「……ひっ！」
近づいてきた男の股間を見た途端、フィオナは顔を強張らせてしまう。
目前に突き出された肉棒は、まるで子供の腕ほどの太さ。竿に無数の血管が浮かび上がり、とても直視していられないグロテスクさだ。
（これが男の人の……なんておぞましい）
ペニスを目の当たりにするのはこれで二度目、かつてクレオラ砂漠都市のジュダ王子が実母である王妃と禁断の秘事を行う姿を見せつけられて以来だ。
ジュダのそこも立派な太さだったが、今、突き出されている凶悪な肉竿は少年では決してありえないおぞましさ。見ているだけで背筋に悪寒が走ってしまう。
（男の人はここは、みんなこんなにもおぞましいものなのでしょうか）
思わず、取り囲む他の男たちの下腹部を窺う。どれもおぞましい形ではあるが、目の前にあるものほど太かったり、長かったりはしないということがすぐわかった。
「ふふっ、特別に一番逞しそうなものを選んであげたのよ。だって、名高いフィオナ姫の

アナルバージンを奪うんですもの、並のチンポでは面白くないでしょう？」
そんな嘲笑にも、金髪姫は恐怖と悔しさを噛み締めながら俯くしかない。
（あんなに太いものが、お尻に……怪物の触手よりも硬くて、逞しい……）
上目遣いで見詰める、おぞましい男根。それが自分の尻壺を埋めることを想像するだけで、入口がキュッと窄み、肌が泡立つような寒気が走る。
「さあ、グズグズしないで改めておねだりしてみなさい。その太いチンポで、ケツ穴をかき混ぜてくださいって!!」
「くぅ……わかりました。は、早く……ください。太いチンポで……わ、わたくしのケツ穴をかき混ぜてください!!」
「いい覚悟ね！　それじゃあ……じっくりと楽しみなさい!!」
涙をこらえて叫んだ、金髪姫の淫らな言葉。続いて放たれた、魔眼の姫君の楽しそうな声に合わせて、正面に立つ巨根の男が動き出す。
「ひんっ……やっ、あああっ!?」
いきなり身体を持ち上げられ、胡坐をかいて座った男の膝上へ、背中から抱きかかえられる。濡れほぐれた割れ目の上をなぞる、焼けるように熱く硬い肉幹の先端。そこに滲む熱液をこそげ取るような摩擦の直後、粘液塗れになった亀頭が後孔へ押し当てられた。
「ヒィッ!?」
肌が泡立つ恐怖とともに、耐えきれない悲鳴が咽の奥から込み上げる。

蠢く皺の一本一本に伝わってくる焼けた鉄のような灼熱感。柔軟に蠢く触手とは違う、さらに凶暴な感触だ。

（これが、わたくしのお尻の中に……人間の、男の人の……性器が）

おぞましい怪物ではない。ついに人間の男の性器で身体を汚されてしまう。

絶望的な瞬間が間近に迫っている。意識が闇に落ちてしまいそうになるのを、唇を噛み締めてどうにかこらえた。少しでも気を緩めると、情けない悲鳴がもれてしまうだろう。

（耐えないと。レーシアを、マリインを……皆さんを守るために）

自分に仕える乙女たちを救うためならば、この恐怖も乗り越えられる。

そう自分を必死に鼓舞しつつ、硬く目を閉じた――その直後。

ミリィィッ！　ミチュルルルッ！

「はがぁっ、おぉっ⁉　ひぐぐっ！」

一瞬意識を失ってしまうほどの、耐えがたい圧迫感。内臓がすべて持ち上げられ、咽まで込み上げてくるような息苦しさに襲われる。押し当てられた極太竿が、容赦なく一息に腸道の深くまで突き込まれたのだ。

目の前が真っ白に染まった直後、赤い火花が散るような激痛で、無理矢理意識を引き戻されてしまう。

「ふふっ、ご覧なさい。可愛らしいケツマンコへ、しっかり突き刺さっているわよ。極太の醜いチンポが‼」

魔眼姫が歓喜を噛み殺したような声で叫ぶ声に、視線が自然と下へ向く。
大きくM字に脚を広げたまま抱えられ、丸見えになった股間。生き物のように蠢く割れ目の真下の小孔が、極太竿で乱暴に貫かれている。
そのあまりにも無残な光景が、潤んだ瞳に映し出された。
「ひぃっ、あぁっ、こんな……おひり……あぁっ——おっ、はんんっ！」
ついに怪物ではなく人間の欲望で、肢体を汚されてしまった。
尻穴を貫かれても、王族の決まりには関係ない。それでも、この恥ずかしい穴を太く醜い欲望竿で貫かれたショックは、涙をこらえきれないものだった。
（わたくし、とうとう怪物だけではなく人間にも犯されてしまいました……あぁ……）
今にも裂けてしまいそうな激痛。そして不浄な穴を貫かれている光景を、レーシアやマリイン、仲間たちの悲しげな瞳に見詰められているという羞恥に耐えきれず、反射的に抜こうと腰を浮かせてしまう。
だが、それを追いかけるように男も腰を強く突き上げてきた。
「はがぁっ、おぉっ、あああっ！　壊れりゅうっ、ひぃっ、んっ！　おひりがズリズリぃ……はぁっ、おぉっ！」
アナルバージンを失ったばかりの姫君を、容赦ない男のピストンが襲う。
限界まで引き伸ばされた腸粘膜を、焼けるように熱い竿肌が擦る刺激。
傘のように硬く張り出したカリ首が蠢く孔口を捲る。気が遠くなるような疼痛とともに

形を変えるそこは、まるで自ら意思を持ち動いているようだ。
痺れるような感覚は下腹部全体に広がり、太腿や尻房の感度も高まる。
無骨な指が肌を押す感覚。突き上げに合わせ、剛毛に覆われた腰でスパンキングされる衝撃。男の欲望を満たすための玩具にされていることを強く実感させられ、その惨めさと苦痛で涙が止まらない。
「姫様ぁっ……」「フィオナ姫、なんとおいたわしい……」
約束通り陵辱から解放され、床に投げ転がされていた女騎士たちが、そんな主君の姿に涙しながら声をあげる。
彼女たちへ心配をかけてはいけない。その一心で必死に笑顔を取り繕おうとするが、ズンと断続的に響く熱い衝撃に邪魔をされ、思うようにいかなかった。
「み、みなさんぅ……わたくひぃ……らいじょぉ……ぶぅっ、おぉっ！」
「ほら、ただやられているだけじゃなくて、自分でも動きなさい。淫らに腰を振って、チンポを喜ばせるのよ！」
必死に言葉を紡いでいた金髪姫へ、魔眼姫から容赦ない指示が飛ぶ。
「こ、こひぃ……みりぃ……はぁっ、もぉっ、身体……動かなくぅ……」
「ふん、よく言うわ。こんなにオマンコまで活発に動かしているくせに」
――ズチィ、ズプププゥッ！
涙ながらに訴えた直後、小さく震えていた膣口へ再びヒールのカカトが突き込まれた。

先ほどよりも盛大な水音を響かせながら、細く硬い感触は一気に処女膜まで到達する。
「そこぉっ……ま、前は……」
「危ないわね。思ったより濡れていたから、入りすぎてしまったわ」
楽しげな笑みを浮かべながら、魔眼姫は足首を左右へ素早く動かす。
後孔を太いもので埋められているせいだろう。膣壺はさらに狭まり、硬いヒールがゴリゴリと振動が響いてきそうなくらい壁面を擦る。
「はぅっ、やぁっ、そこは……んぁっ、くひぃっ！」
「どうしたの？　無理と言うなら、他の牝豚どもに代わってもらう？」
「やっ、やります！　動きまふから、はぁっ、ひぃっ！　うっ、あぁ……」
――ニチュッ……ズップッ！
魔眼姫に煽られ、フィオナは悔しさと羞恥を奥歯で痛いくらいに噛み締めながら、痺れる腰に力を込める。
「はひぃっ、くっ！　あぁっ、ぐりぐりぃって、こしゅれぇるぅ！」
軽く腰を浮かせた瞬間、ゴリッと音を立てて肉傘が腸壁に引っかかる。身体の芯を雷に打たれたような痺れが走り、意識が一瞬遠のく。
「あらあら、感じすぎて腰が抜けたの？　初めてのアナルで、そこまで感じるなんて、救いがたいくらい淫乱ねぇ！」
「うぐっ、はぁっそ、それはぁ……ひんっ、ふぁっ、らめ……くんっ！」

「ふぅ、仕方ないわね。あなただけは……自分の意思で乱れる屈辱を、味わわせたかったのだけど。特別に手伝ってあげるわ」
「ふぇ……っ⁉」
メイベルローゼが呟いた直後、その瞳が血のような真紅色に輝いた。
瞬間、金髪姫の全身から力が抜け、指一本自分の意志で動かせなくなる。
他の女騎士たちを操り人形にした、魔眼。その力に支配されてしまったのだと気づいた時には、肉体は少女の戸惑いにかまわず動き出していた。
ズプゥッ、ヌプッ、ジュププゥッ！
「あぐっ、ひんっ！　やぁっ、こ、こんな乱暴に……んんっ！」
男の剛毛に覆われた太腿の上で柔らかい尻房を淫らに弾ませ、全身を上下に揺さ振る。腸壁に深々と食い込んで、乱暴に拡張しながら出入りするペニス。息苦しいほどの圧迫感に視界が揺らぐが、それでも自由を失った身体は淫らなダンスを続ける。
さらに手が自然と胸元に伸び、動きに合わせて扇情的に揺れる巨乳を掴み、そこを誘うように揉み始めた。
「あはっ、アハハハハハハッ‼　ご覧なさい、イーバ！　あのフィオナ姫が、自分で腰を振って、ケツマンコで喘ぎ狂っているわよ」
「ひぁっ、きゅぅっ、はんっ！　はぅぅんっ！　わ、わたくしはぁ……」
「言い訳はいらないわ。こんなに美味しそうに咥えているくせに！」

「そうだそうだ！　ケツ穴でイキ狂いそうになってる、変態姫めっ！」
「そうれすぅっ！　自分で腰を振って……ケツマンコでチンポ咥える、牝豚なんれぇ……しゅぅっ、はん！」
すべては魔眼のせい。呂律の回らぬ声で言い訳をしようとした声も、魔眼の力で途中から淫らに誘う言葉にすりかえられてしまう。
「イセリアの聖女も、一皮剥けばこのザマ。本当に牝豚ぞろいの国なのねぇ！」
「はぐぅっ、メイベルローゼ……あ、貴女という子はぁ……」
容赦なく女の身体と心を踏みにじり、歓喜の声をあげる。冷酷な姫君の容赦なさに改めて恐怖を憶えながらも、望まぬ淫らなダンスは強制的に続く。
「おほぉ、ひんっ！　おひりぃ……まだグリグリぃっ、んんぁ！」
男の突き上げに合わせて腰を深く落とし、より深くまで貫かれる。
奥深くまで焼けるように熱く擦られて、膣壺を穿るヒールとの衝突も強くなり、肉皺の一本ずつが震えるような快感が高まっていく。
尻房が淫らに弾む度、飛び散る愛液が薄い金色の茂みや正面に立つ魔眼姫のブーツまで濡らし、その甘ったるい香りに淫らな雰囲気が盛り上がる。
（駄目……このままでは……）
気を失ってはいけない。そう思っても、魔眼に支配されていて歯を食い縛ることすらできない。強制される腰の動きは加速する一方。いっぱいに埋められた尻壺が深く突かれる

度、ズンと視界が揺らぐ快感が込み上げ、緩めた唇の端から唾液が垂れてしまう。
「そろそろ限界？　なら、おねだりしなさい。他の牝豚の代わりに、わたくしのケツマンコを孕ませてと」
「ひっ、あぁっ、しょんなぁこと……んぉっ、はぁくっ、あぁ……」
「姫様……おやめください‼　くっ、殺せ！　姫様の足かせになるくらいなら……名誉ある死を選ぶ！　早く私たちに止めを刺せ、ゲスどもっ、この、このぉっ……」
魔眼姫の命令に戸惑った直後、レーシアの悲痛な叫びが聞こえた。
自分が弱気な姿を見せれば、その分だけみんなを苦しめる。薄れる意識の中、それを改めて思い知らされた少女姫はぎこちなく頬を緩めて訴える。
「らぁいじょぉうぶぅ！　はひっ、こ、これくらい、みなしゃんのためなら……はんっ、はぁっ、ですから……ケ、ケツマンコぉ……わたくひのケツマンコ、孕ましぇてぇっ！」
「あははっ、よく言ったわねぇ。それじゃあ……一発目よ‼　そのいやらしい穴でたっぷり受け止めなさい、牝豚姫！」
勝ち誇る声とともに、メイベルローゼのヒールが膣壺の下壁を強く突く。
隔壁越しに、尻壺摩擦で膨れ上がったペニスを刺激したのだ。そう理解した直後、尻房が男の太腿と密着するまで腰を落とすことを強制された。
狭い腸道が極太竿を頭から根元まで強く擦り、その焼けつく摩擦に思わず菊穴を締めた瞬間、ビクンッと力強い脈動が尻壺を震わせる。

ドップンッ！　ビュブブボォッ、ビビュルッ、ビュブブブブブブブ！
「ンほぉっ、あぁぁっ！　ひんっ、お、おひりぃビュルビュルぅ⁉」
腸道を駆け昇ってくる、溶岩のように熱くドロリとした感触。牡の子種汁を排泄器官の奥まで流し込まれている。耐えがたい羞恥が全身の疼きを弾けさせ、意識が吹き飛ぶような絶頂感を生み出した。
「イィッ、んぐぅっ、おおおっ！　おひりぃっ、もぉっ、燃えりゅぅっ、ジンジン熱くて……んひぃっ、イグ、あひぃっ、はぁ、んほおおおっ、おおおお⁉」
肉幹の脈動に合わせて鼓動がいっそう高鳴り、火照る肌が滲む汗でじっとりと濡れる。膣壺もヒールで執拗にかき混ぜられ、恥ずかしいと感じる余裕すらも失ってしまう。
「アハハハッ、イッたの？　汚いケツマンコを犯されてイクなんて……さすがは、淫乱ぞろいのイセリアの牝豚の、頂点に立つ姫君ね。見事な牝豚だわ！」
「め、めしゅ……ぶたぁ……ひぃっ、ち、ちが……わたくひぃ……」
容赦ない罵倒に言い返そうにも、唇までもが快感に痺れ、まともに言葉を紡げない。
がっくりとうなだれ、自然と結合部を覗き込む形になると、貫かれたままの肛門からゴボゴボと放たれた精液が逆流するのが見えた。
「お、お尻……ドロドロぉ……こんな、はひぃっ、あぁ……」
その淫らで屈辱的な光景が、少女姫の誇り高き心をついに打ち砕く。ランプの火を吹き消したがごとく意識が黒く染まり、言葉を発する余力もなくす。

「ぶもぉぉおおおおぉぉおおおっ」
魔豚が、甲高く嘶いた。瞬間。
どびゅりゅぅぅぅぅぅぅっ！　どぶどどぐぅぅぅっ！　どばりゅぅぅっ！
「なっ……！　あっ、あついいいいっ！」
灼熱を腹の中にぶちまけられてはらわたが燃え上がった。
開けたシャンパンから泡が噴き出すように肛門の奥で何かが溢れている。それが子宮の裏側を焦がした瞬間、噴出するアクメの電流がアヌスをくぱぁと開かせた。
「ぁ、あああっ、あ――――――ッ！」
頭蓋が沸騰して視界が歪む。背骨が弓なりに反り、腰がヒクヒク痙攣した。
（あ、ああ……わたし、はっ……ぶたの、でっ……あ、あああっ……）
魔物の――豚の精液を注ぎ込まれて、小さな絶頂に達してしまったのだ。
どぷん、どぷんと、豚の射精はまだ終わらない。直腸から結腸、大腸へと流れてゆく生汁の感触に身震いする。真っ赤なうなじをイヤイヤと振るセリーヌ。
「いっ、いっぱいっ……！　こんなに、いやだぁあ……ぁ、ああっ」
「ぎゃはははっ！　いっぺえ、流し込まれたなぁ」「おうおう、ぜんぶ飲んでるぜ。騎士様の尻孔は大食らいだな」「ケツで妊娠するんじゃねぇの？　がははっ！」
降り注ぐ嘲笑と侮蔑――屈辱に、割れんばかりに歯を噛み締める。
「おのれ……おのれぇえええっ」

穢されたイセリアの、戦女神の怨嗟を前にゴルヴァーナは、愉しげに顔を歪めている。その面貌は魔豚と比べて遜色ないほどに醜いものであった。

「さあ、お前たちっ！　そこの女どもを、存分に犯してあげなさいっ」

と、彼は兵士たちに命じる。セリーヌの痴態に欲情しきっていた男たちは、歓声をあげ、妊婦騎士へと群がっていった。

「なっ、は、話が違うっ！」

手を出さないと。そう言ったはずだ。

「くすくす。もうあんたも、あいつらも、わたしの玩具なのよ、だ・か・ら。――壊れるまで、遊んであげるわ」

襲われる女騎士たちの悲鳴が響く。それは悦楽の期待が混じった甘い悲鳴である。

四つん這いを強要され、嬉々として従う女騎士。売女のように己の指でヴァギナを開くと、ずぶずぶと肉孔を貫く男の肉を喜悦の歌にて迎え入れる。

「あひゃっ、んひぃ、いいいいっ！、チンポッ！　あはっ、はいってきたぁっ」

それは聞いているほうが恥ずかしくなるくらいの、羞恥を脱ぎ捨てた嬌声だった。

「飲ませてっ、おチンポ汁のませてっっ……いっぱい出してっ！」

あどけなさの残る少女騎士が小さな唇を目いっぱいに開く。うう、と男が呻いて、そこにどびゅどびゅと肉汁を注ぎ込む。少女はうっとりとそれを飲み込んでゆく。

赤毛の騎士が膨れ上がった赤子腹を突き上げられている。

「んぐぃいいいっ！　あ、あがちゃんに、あだってるうっッ！　ひぎぎっ！」
彼女を犯す肉根は他のものよりも長いらしく、子宮までをごつごつと穿たれて、ぐしょ濡れの汁孔から蜜汁を噴き出して狂ったように叫んでいる。さらに向こうでは、散々に犯されたのだろうその肉孔に腕を突っ込まれて責められている女もいた。
「おいおい、腕まで入るじゃねえか。まああんな化け物に犯されりゃなあ」
男の鍛えた前腕は、肘の近くまでが潜り込んでいる。膨れ上がった腹の、胃の中にまで届いているのではないか、そんなことを思わせるような光景だ。
「いいひぃい～！　ながっ、うでぇ、動かさないで、てくびぐりゅぐりゅしないでぇっ」
ぶんぶんと髪を振り乱し、涎を散らして泣き叫ぶ女騎士。汁という汁を垂れ流し、股を開き腰を蠢かせ、苦しそうな、気持ちよさそうな、壊れた声でフィストの辱に泣き喚く。
「あ、ああっ、ふぁあっ……」
髪を掴まれ引き上げられたハヤテが、乳房を握り潰されて悩ましげな悦声をもらした。
ハカマと呼ばれる紺色の下衣は引き裂かれ、押し倒されて大股を開かされる。
曝け出されるヴァギナは幾度も犯されたことを証明するように褐色にくすんでぬらぬらと濡れ光っている。そこをのしかかる敵兵の汚肉でぬちゅりとかき分けられると、彼女はしなやかな体躯を喜悦に震わせた。
「んっ、んんっ……ふぁああッ！　ああ、きもひぃいいっっ……」
亀頭から肉幹までが抵抗もなくぬじゅるりと潜り込むと、サムライ娘は白雪の肌を浅ま

しく紅潮させて身悶える。さらにはぐちゅぐちゅ内部をかき混ぜられ、孕み腹を揺らして「あひぃぃぃ！」と甘い声で泣き喚くのだ。

ずぶっ！　ずぶぶっ！　ぐずぶっ！

「ああっ、あひぃンッ。し、しぇりーぬさまっ……！　い、いいですよ、おちんぽぉっ……。あははっ。んぅ、メ、メイズでぇっ、オークとか、ゴブリンとかにぃっ……ああっ。いっぱぃい、ズボズボしてもらってぇっ……いっぱいきもひよく、なったんですぅっ」

凛とした美貌は見る影もなく溶け堕ちていた。乳首は硬く痼り、肉塊を咀嚼する花唇から止め処ない愛液を垂れ流しながら、ハヤテは夢見心地に首を振る。

カタナそのものであったようなサムライは、肉刀の鞘と成り果てて……幸せそうだ。

あまりにも――見るに堪えない。

「やめろっ、もうやめてやれっ……」

目を閉じ耳を塞ぎ、哀れな騎士たちの情景を遮断しようとするセリーヌの下腹で。

「ぶるおっ、ぶもぉおぉ！」

「ングゥウヒッ！　ま、またあっ、おひりぃっ……!?」

魔豚の男根が再度の侵攻を開始した。直腸の内部でまた、灼熱が膨れ上がっていく。アヌスリングがみりみり軋んで広がってゆく、尻たぶが左右に引き裂かれる。

めぎゅ！　めきぎゅ！　めごっ！

「オゴッ……がっ……！　ああ、貴様らっ……ゆる、さない、ゆるさないぃいっ…ッ！」

目前で展開される仲間たちの恥辱が、尻肉を犯されるイセリアの騎士に反抗心を呼び覚ます。腕に、足に、腹筋に力が籠もり、括約筋が、豚のペニスをぎゅうっと握り締める。

「ぶぉぉおおもぉおおおっ……ッ！」

皮肉にも……それがなお、異形に与える快楽を増させてしまうのだ。

獣棒がぐっと引かれる。噛み締めるセリーヌアヌスはそれを放すまいとして、尻肉ごとぐぐっと持ち上げられた。自然と、床に膝をついて尻肉を持ち上げた姿勢を取らされる。そんな格好の牝の尻に、覆いかぶさる発情した牡豚――。

それはまさしく獣同士の交合の様相だ。

「っ、くあぁっ……！　おうっ、おふぅっ！　あっ、あううっ、くぁぁっ！」

じゅぼじゅぼじゅぼじゅぼ出入りする肉根に前後され顎が床を擦る。

背中よりも上にある尻肉から、汚濁の腐汁が腸内を遡ってくるその感覚にぞっとする。

（なかでっ……せーえきが、ああ、おなかのほうに流れてくるぅっ……）

臓腑を汚染していく、ザーメンと腸汁の混じりあった肛肉スープ。男根の激しい前後運動に腸が蠕動して、そのおぞましい汚水が粘膜の奥まで染み込んでゆく。

（ああ、あつい……おしりが、コーモンがぁ……灼けるッ……！）

痛々しいほどにぷっくりと膨らんだ真っ赤な肛肉に、容赦のない刺突が繰り返される。それはただ、獣の情欲を解消するだけの嗜虐に他ならず、誇り高きイセリアの戦乙女の、その肢体はまるで、ただ肉欲を排泄するだけの玩具のようだ。

そんな屈辱的な扱いなのに――。

「ふあっ、ああっ！　おひゅんっ……き、きもち、いいっ……くそぉっ！」

奥を小突かれ、子宮を潰される度に、頭の中が白く弾ける。獣の体重に胸肉が押し潰されて、プレートの裏側に乳首ごとずりずり擦りつけられて、その乳悦が心地よい。

引き裂かれたショーツは彼女の愛液でドロドロに濡れそぼち、前孔を隠すように張りついている。熱い息をふいごのように吐き出す、その口腔から溢れる唾液は床に溜まりを描き、蕩けきった眉尻は、肛門から溢れ出す肉悦の深さを物語る。

（こんなの……こんなのっ！　きもちいいわけっ……ない、ないのにぃっ……）

魔の媚薬で強制的に引きずり出された牝のカオ。それはあまりに浅ましかった。

（無理矢理なんだ……わ、私はイヤなのにっ、それなのにぃっ！）

「んぐぅっ、おふんっ！　あっひ、おひりぃいっ、くひぎっ、いいぃいいっ！」

恥知らずなほどに悦に蕩けた声を抑えきれない。無理矢理に押さえ込まれて排泄の穴を犯されて――その背徳的な現実までが、被虐の悦楽となって襲いかかる。

（と、とぶっ、どこかに、飛んでいきそうだっ…頭がおかしくなるっ）

紅潮する内股が震えふくらはぎがぴくぴくと引き攣る。豚チンポのイボイボに腸皮をえぐられて腰が跳ねる。ずっしり重い白濁が、腸の中をまた深く逆流してくる。

「ああぐぅっ……！　も、もう、だめだっ……や、やめぇっ……、ひぎぅっ！」

力ない懇願も獣には届かない。乱暴にはらわたをかき混ぜられて、それがこんなに気持

ちいいなんて。排泄のための穴が、まるで性器だ。肛門性器を深く、深く掘り起こされて、腸壁に広がりゆく切ない悦楽に、理性も何もかも痺れていく――。

「いぐいっ！」「おあひぃい」「はぎぃいいいっ！」

その時、異様な声が耳に届いた。

女騎士たちは皆仰向けに、腹を抱えて激しく暴れている。彼女らを犯していた兵士たちはその身体から離れ、距離を取って、面白そうに目前で始まった惨劇を眺めている。

妊娠腹が――ぐにゅぐにゅと、異様に蠢き始めていた。

「うっ…うまれるぅうううっ」「ひぃい～ひろがるっでてくるぅっ」「お、おあっ！」「んんぐっ、ああーっ！」「あおおっ、とめっ、とめへぇぅ」

汗塗れになって狂乱する彼女たちの膣ビラが、勝手に開いていく。中から何かがこじ開けようとしているのだ。膣孔が広がってゆき、尿孔までが口を開く。

ああ、肉門の向こうにいるのだ、頭を押しつけているのだ。異形の赤子が。

（う、あ、……こ、こんなのってっ……ほ、本当に、産まれるのかっ）

人間の出産も見たことがないセリーヌの目の前で始まるおぞましい魔獣の出産ショー。女騎士の下腹がぼごんぼごんと形を歪める。中で、赤子が蹴りつけているのだ。出たい出たいと早く出してと、ママにおねだりをしているのだ。

「あああああっ」「いやぁあああっ」「ぐひぃいいいっっ」

激しく首を振り、目を剥いて悶える騎士たちの腰が何度も何度も跳ね上がる。その度に

みちみちと爛れたヴァギナが広がっていく。
「あ、あ、あ……ぅ。おなが、げっでる、でてくるっ……！　せ、セリーヌさまぁっ…」
ハヤテが――あの凛とした侍が、内側から腹を蹴られて黒髪を振り乱し泣いている。床の上に仰向けで、蛙のように大股開きで、出産の苦悦に多量の汗を滲ませている。
「でるぅっ、でるでるぅうっ……！　あかちゃん、産んじゃうぅぅっ！」
まるで壊れた人形のように、ハヤテの全身が痙攣を始めた。その肉孔からぬぷぅと――真っ赤な頭蓋が、見えてきた。
「ひぃっ……」
あまりにもおぞましい情景に、セリーヌすらも身体を竦ませた。
「んぐほぉおおっ！　おんぐううう！」
汗と涙と鼻水に塗れ、小便までもらして――けれどハヤテの、騎士たちの顔には僅かな笑みが浮かんでいた。それは子を産む母親の悦びである。
ああ、けれど――。
これは子を産む母親の姿ではない。ただの苗床として利用された、ただの肉の畑だ。
「こんなの……こんなの、ない……」
同じだ。私も彼女たちと同じ女で、同じことをされるかもしれないのだ。だから、こんなにも怖い。槍に刺されるよりも、剣に斬られるよりも、遥かに恐ろしい。
かちかちと歯の根が合わぬほどに。女のすべてを破壊する、その無残に怯えていた。

そして――ぐぼぉおおっ！　と。赤子の頭部が、五人の肉門を抜け出した。
「「「「「んぐぅぅうぉぉお――――――――ッ」」」」」
揃えた悲鳴は出産苦悦の五重奏。現れたのは、肉を捏ねて丸めたような真っ赤な塊であった。巨大な瞳が見えた、裂け上がった口が見えた、人にあらざる異形の顔が見えた。
「「ヒギィイイィギイイィイイイィアィアイイイイイィイィアイイィアイイィイ」」
それは、おぎゃあと、聞こえた。
「あひぃいいっ！」「あ、あがじゃんっ」「くひぃーっ」「でてゆぅっ」
眼球が飛び出るのではないかと思うほどに目を剥いて、顎を仰け反らせ悶絶する彼女らに、けれど休息は訪れない。
尚更に太い胴体が、肉道を広げてゆく。身体を捏ねくり、左右に揺さ振って、じわじわ這い出る肉の塊。まるで赤いナメクジのようなそれが暴れる度に、妊婦騎士たちは狂ったように四肢を暴れさせて出産の苦悶に悲鳴をあげる。
「いぐぅうぅ！　いぎぃいぃ」「うまれるぅ、うまれるのぉおあっ」「あがじゃんでいっちゃうぅうう」「わたじのぉー私のあかちゃんんー！」
その悲鳴に混じる、確かな悦楽の彩。犬のように舌を吐き出して、乳房も尻も真っ赤に蕩かして、魔の出産に激しい快感すら感じているのだ。
「あ、はひぅ……！　わたひの、わたひのあかひゃんっ……！　あぐぅうう！」
ハカマを邪魔だとかき分けて、赤子をムリムリひり出すハヤテは己の股座を見下ろして

幸せそうだ。赤子の体躯は快楽の本気汁でヌルヌルと濡れそぼっている。剣術で鍛えられたサムライの身体は魔物の母胎になり果てて、出産アクメに媚肉を震わせてヨガっていた。

「う……ああ……おまえた、ち……！　んっ、んぐぅァアッ！」

狂躁、狂乱、腹をのたうたせ獣のように泣き喚く女たち。その声に情動を加速されたかのように、魔獣もまた猛りセリーヌの皺肛門に激しく腰を叩きつけてきた

「ぶむっ！　ぶるぅううっ！」ごづぶっ！　づぶづぶづぶっ！　ぬじゅるっ！

「あっ、ああっ！　ヒッヒッヒィイ！　おひり、おひりぃっ、ごりゅごりゅっ……けずれるっ、おひりけずれるぅうう！　んぐほぉっぉお〜〜ッ！」

獣根にかき回されこなれきった排泄性器でザーメンスープの泡がたつ。腸肉の奥の奥を突かれて子宮を押されるごと甘美なうねりが脳髄まで押し寄せて身体がうねる。真っ赤に染まった尻ぶたが、ぶるぶると波打ち痙攣する。

ぐにゅりぃ、っにじゅるりっ、みちゅりっ！　ごちゅっ、ぬばあっ！

「だ、だめっ、だめだっ！　いぎっ、いぐひっ、あ、あぁあああーっ！」

涙と鼻水でぐずぐずの顔から甘い苦悶を吐き出しながら、垂れる舌が涎を散らす。

（来る……くるくるっ……おなかの、おくからっ……何かが来るっ）

身体の中から熱い何かが広がっていく。腸壁がゾクゾクと震え、子宮から熱い快美がマグマのように溢れ出る。もう、何度も経験した、絶頂への予感を必死で振り払おうとしても、性器と化したアヌスは悦びの毒を脳へ流し込んでくる。

（嫌……嫌だっ！　いやだぁあっ……）
もう、イキたくないっ、こんなことでイキたくないっ！
「んぎっ、ひぃっ！　や、だ、いやだっ！　くひぃ――っ！」
全身を溶かし尽くすような絶頂の波に、唇を噛んで耐える。
だが。胃の真下まで突き上げる一撃に、赤子袋がぐじりとたわみひしゃげて。
「っ、そんな、奥までぇえっ！　んひへぇえぅっ！　だめえぇえっ――――ッ！」
もはや抑えきれぬエクスタシーの奔流に、肢体が凝固した。尻肉が、括約筋がぎゅううっと収縮して、戦女神の鍛え抜かれた尻筋が、魔物の肉根を思いきり握り締める。
「ぶぅもるぅうぅばるぅうぅうっ！」
その、肉棍棒を圧搾するかのような締めつけに呻きながら、魔豚はトドメとばかりの一撃を、ぬめり輝く尻肉に叩きつけた。
ズブゥウゥウウゥウゥッ！
「ヒギッ――――――ッ！」
子宮まで響く強烈な一撃が、セリーヌの顎を蹴り上げた瞬間。
粘膜焦げつく皺肉の奥底、括れた腰の裏側で、熱い豚汁が撒き散らされた。
びゅるぅうっ、びゅるぅうぅうっ！　どぶりゅっ、びしゃあああっ！
「あ――ひっ、いいぃ……っ！　あ、ああ、ふぁあああっ……ッ」
お腹がぶくぅと膨れた。一度射精しているのにまるで減じない大量の精液塊が溢れかえ

り、ぎゅるぎゅると腸内を逆流していく。ビクビクビクッ！　と尻肉が痙攣した。
「お……おなかがぁ……やぶっ、やぶれ……りゅぅうぅ！　あぁあぁあああ～～」
灼熱の膨張圧迫が子宮までも押し潰す。髪を振り乱し、ドレスの裾をはね上げて、脳漿が沸き立つような快感の奔流にセリーヌは絶叫する。
「イクぅっ！　くあぁぁあっ……おひりでイクぅぅぅぅぅ――――――っっ!!」
ロイヤルブルーの髪が翻る、剥き出しの太腿に細波が広がってゆく。脚を反り返し、駆け巡る絶頂の渦にイセリアの戦女神は肢体をビクビクと痙攣させわなないた。
そして同時に、ごばりゅっ！　と。妊婦騎士の割れ肉から、魔児の塊が飛び出したのだ。
「で、でたぁっひいいぐぅうっー！」
「う、うまれだのぉおぉおぉうっ、あかちゃんうんでいってるぅうぅっ！」
「はんぎゅっ、ほひぃ――――っ！」
「しゅごいのっ赤ちゃんでりゅのしゅごいのほぉおおおっ！」
凄まじい出産アクメに襲われて、五つのマンコから五匹の魔物をひり出しながら、女騎士たちは白目を剥いて悶絶する。ハヤテもまた、黒髪を床になすりつけ、持ち上げた腰をガクガクと震わせながら、その股座から肉塊を吐き捨てた。
「あはぁあっ……！　うまりぇ、うまりぇまひた、ハヤテのこどもですよぉ……。しぇーりーぬさまっ、この、子……あはっ、りっぱなイセリアの、騎士にしまひゅぅ……」
誇り高きイセリアの騎士たち、その大きく開いた股座から産み落とされた赤い肉塊が、

床の上で芋虫のように蠢いている。それを嬉しげに眺める、彼女たちの顔は誰もがひどく嬉しげで、子を産んだ母の幸せが彼女らを包み込んでいた。

「はあーっ、はあっ……あ、ああ……おまえ、たち……」

絶頂の余韻に震えながら、セリーヌはそれに悲しい目を向けていた。

(私は……何と、無力なのか…)

「ぎゃははっ！　不様ね、不様不様っ！こんなものじゃあ終わらないわよ。もっともっと遊んであげるわ。ぎゃはははははははっ、ひゃはははっはははは!!」

耳に響くゴルヴァーナの嘲笑。たまらない悔しさに、ぎっと歯を噛み締めた。

――その時であった。

「そこまでだ」

凍えた声が室内を凝固させる。

ゴルヴァーナの首筋に、鋼の輝きが食い込んでいる。ふと気がつけば、その部屋にいた敵兵の全員が、床に倒れ伏しているではないか。

幾人ものイセリアの兵士が、その部屋にいた。第二騎士団の面々だ。

「い……いつのまにっ……!?」

勝ち誇っていた表情が、怯えのそれに塗り替わる。そんなゴルヴァーナに背後の女は無言のまま、より深くナイフを押しつけた。

水色のショートヘアに青紫の瞳が輝いている。整った顔立ちに表情はなく、けれど彼女

から放たれる氷のように冷たい殺気は、眼前の陵辱劇への感情を如実に表していた。
砦への潜入部隊が、到着したのだ。
彼らはセリーヌの上から魔豚を追うと、飛びかかり屠殺してゆく。
「申し訳ありません……遅くなりました、セリーヌ殿」
「アイネ……」
ゴルヴァーナを捕らえたのは、アイネ＝ルーデンラームという名の少女だ。
蒼龍魔法中隊と呼ばれる、魔術部隊の一員である。この強襲作戦において、隠し通路の隠蔽魔術を解くために、第二騎士団に派遣されていた。
「今からこの下種に、軍の降伏を命じさせますので。お待ちください」
「お、おほほっ！　何を言うのかしらあ？　イセリアのメスブタなんかに、誰が降伏するって……ぎゃぁぁあっ！」
憎まれ口を叩こうとしたゴルヴァーナが悲鳴をあげる。ぼとりと――その片耳が落ちた。
血に濡れた刃の先端が、次いで眼球に突きつけられる。
「……次はどこがいい？」ぽつりと呟く、アイネ。
バーンドベルグ全軍に向けて降伏の鐘が鳴らされたのは、それからすぐのことであった。
一週間後。旅の傍ら、身体を休めながら、ようやくイセリアに帰国することのできたセリーヌは、女王アリオナ＝ブリティッシュと謁見した。

「そうですか、そんなことが……」
女王は、椅子から溢れそうなくらいに豊満な肉体を悩ましげに揺すり、深々と嘆息した。病床明けの身にとって、難題続きのこの状況は辛いものがあるのだろう。
けれど、その冴えぬ顔色も、伏し目がちの瞳も、彼女の美貌をそこなわず、むしろ皓々と輝く月の光に似た魅惑を周囲に振りまいているのだ。
同性のセリーヌすら、胸を高鳴らせるほどに。
「は……はい。特に、バーンドベルグとクレオラ砂漠都市の同盟は、我が国にとって一大事です。早急に対策を立てねばなりません」
イセリアにその報を届けた氷継は、すでにフェイエンに帰国している。
「そう、ですね……。セリーヌ。あなたは第一騎士団を率いて、クレオラ砂漠都市からの侵攻を食い止めてもらえますか？　北方のバーンドベルグを相手には、捕虜にした第二王子を人質に、時間を稼ぐことにしましょう」
「イエス、マム」
一歩退き、頭を垂れる。
「……あなたには、難しい局面ばかりを押しつけます。セリーヌ……」
「何を仰いますか、アリオナ様」
気遣う女王に笑み返し、セリーヌは胸の前で拳を握った。
「存分に。それが騎士の誉れなれば」

男は両手で左右から押すと、乳肉を締めてじっくりと擦り込んでくる。火傷しそうな熱の塊がハチミツ色の谷間を滑っていく。

それは確かに陵辱なのだが――当の爆乳姫は腰をくねらせて身悶えていた。

胸の芯に溜まった疼き。それが熱塊をシゴく度に甘く蕩けるように癒やされていく。溜まった湿気さえ今は心地よく、ハチミツの甘い香りも鼻腔を火照らせてくる。

「はあ、はあ、らめぇ、ぁぁ熱いぃ……！　あん！　胸ぇ、どんどん……」

（き――気持ち、いい……胸に、乳房に響いて、身体が熱くなるっ！）

初めて――体感する淫戯を良しと思う豊満プリンセス。

これまでの陵辱は、ただ一方的に相手が悦ぶだけだった。しかし今、口でさえ忌避できずに、ペタンと座したまま谷間の性器を潤んだ瞳で見入っている。

重量感たっぷりの美爆乳は、今はいやらしく形を変えて男根に絡んで扱き続ける。ローションのような甘みも纏って、まるで極上のデザートだった。

そんな果実をたわわに揺らして少女は男に楽しまれる。ただ惑い、感じ、唇から細かく喘ぎ声をもらす。

「アハハ。やっとその気になったわね。ほらぁ、あなたもしっかりパイズリしてあげなさいよ。そのためのデカ乳でしょ？」

実に楽しそうなメイベルローゼが背後からまた手を回してきた。媚乳を掴むと持ち上げ、ねっちりと動かして愛撫を強くする。

「あああっ⁉　だめぇ、感じちゃうぅ……！」
「でしょう？　ほらこうやって、ペニスをいっぱい扱いてやるの。淫乱なあなたなら楽しめるはずよ？」
『淫乱』という言葉に一瞬引っかかったものの。もうフィオナの理性はトロトロに溶けてきていた。すっかり火照った女体は自然と牡に愛でられることを望んでしまっている。
言われるがまま自ら乳肉を動かしてみると、またたまらない甘痺れが乳腺を激しく舐め回し始める。
「あくぅうんっ！　んあ、んああっ！　か、硬い、すごい、ですぅ。胸ぇ、ジンジンしますぅ……！」
――むちゅりっ、ぬちゅむちゅたぷたぷりゅん！
思いきって相手の動きに合わせてみると、逞しい勃起が水音を立てて扱かれていく。身震いするほどの熱感に悦び、フィオナは次々と動きを早めた。
「はあ、はあ、すぅ、すごいぃ、気持ちいいぃ……！」
ついに。快楽を口にしたことも無自覚に、彼女は巨峰を揺すっていく。柔らかな脂肪が竿に吸いついて膣もかくやと愛でていく。
おかげでペニスはますます隆起していった。血管を脈打たせたそれは、肉の硬さと熱さで牝王女の乳性感を刺激していく。
「おぉ、おおっ！　いい、いいぞフィオナ殿！　何という立派な乳房！　何という淫らな

娘だ！」
領主もまた、当初の理性をかき消していた。ただでさえ美しい少女が生乳房を乱してよがっていれば、不能者でもない限り昂らずにはいられない。
傍に控える衛兵たちも、股間を猛らせて仕方ない。我慢できず自ら男根を取り出して扱いている。
「ククク。あなたたちも来なさい。せっかくだもの、一緒に楽しみなさい」
背後でメイベルローゼが乳揉みしながら誘った。彼女はフィオナを牡の味に酔わせたいのだ。
ゴクリ、と喉を鳴らすと、ふたりの衛兵たちがニヤけて駆け寄ってくる。
彼らは鼻息を荒らげながら、パイズリ中のフィオナのバストに左右からペニスを突き立ててきた。
――にゅむりりっ！　むちゅ。
「やはぁあああんっ⁉ ああいやあっ、感じるウウっ！」
途端、焼きごてを当てられたような淫熱が乳腺の奥に染み渡った。
牡の亀頭は赤黒く、まるで魔物に犯される心地。しかし焼けたと思った箇所からは、すぐに身震いするほどの愉悦が駆け昇ってくる。
「あぁらめぇ、ずぅ、ずぼずぼしないれぇぇ……！」
（胸が、焼けちゃうっ！　き、気持ちよくって、男の人が硬くって、わたくしいっ⁉）

もう、頭が爆発しそうだった。まるで乳腺が変質して快楽神経になった気分だった。

だから、男たちが腰を振るとペニスが刺さって気持ちいい。躍る乳房から快楽が止まらず、たまらず腰を弾ませてしまった。

「アハハ！　ほらほら、もっと刺してやりなさい。この女をイカせてあげなさい」

魔姫にうながされるまま、男たちは男根を突き込んでくる。あまりにも特大な柔らか乳房がむちむちと亀頭でえぐられていく。

――ずちょっずちょっむちゅむちゅにちゅりりっっ！

「おおいいぞっ！　何という乳房だ、柔らかくてモノに絡みつくようだ！」

「あぁあぁぁあああんっっらめええ！　あは、はあ、こんなぁ、こんなのっ～～すごすぎますううう!!」

さらに強く谷間を擦られて激しく感じてしまうフィオナ。もはや嬌声を張り上げて汗塗れの肢体をよがらせている。

（ああだめええっ！　胸が、感じすぎちゃって、頭が、お腹が、おかしく……！）

今やフィオナは必死になって快楽を貪(むさぼ)っていた。肉硬いペニスに擦られ、えぐられる度に燃えるような肉悦が乳房と子宮を焼いていくのだ。

子宮の奥はドロドロの淫蜜に溢れ、レオタードを超えて太腿にまで伝っている。汗と交わりヌメリを帯びて、すっかり発情した牝の下肢となっていた。

穏やかな眼差しも淫靡に潤み、谷間から覗く亀頭をうっとりと見下ろしている。そこに

は、犯されることへの忌避など微塵も見られなかった。
そして熱乳房は卑猥なまでに縦長に歪んで男根を楽しませていく。否、自らねっとりと絡みついて逞しい牡を味わっていく。
「アハハ、いいわ、いいっ！　気持ちいいのね？　感じるのね⁉　いやらしいデカ乳が！」
メイベルローゼも後ろから荒々しく揉みしだいてくる。持ち上げるようにして肉竿を扱いてくる。
だがそんなことをせずとも、フィオナはもう乳快楽に取り込まれていた。自らも手を重ねて捏ね回し、唾液を垂らして感じ入っている。
「はあ、はあ、はあ、はあっ！　もぅ、もうわたくしぃ、熱くて、痺れて、胸が、ムネがあぁぁ……！」
熱い限界が処女に迫る。先ほど知った、あの——弾けるような甘い到達感が。
それは、この硬い性器たちが与えてくれる。そう思って、かき回すように乳房を揺する王女。
「はあ、はああっ、あつぃぃ、男のひとのぉ、感じますウウっ‼」
——すちゅるりっ！　もみたぷねちゅるるりぃっ‼
——むちゅむちぃいっ！　ぬちぬちぎゅむぎゅむっ‼
「うおお、絡むっ！　絡みつくっ！　イク、イクぞっっ！」
「わ、我々もイキますっ！　何て乳だ！」

乳圧が強まった途端、男たちも腰震わせる。柔らかい脂肪にまとわりつかれて精液を滾らせる。浮き出た血管が雄々しく脈打ち肉竿は限界まで反り返った。

「ああ、まだ硬くぅ!?　ビクビクって、ビクビクって、わた、わたく……あああっ!!」

射精を控えた男根たちがズブリと亀頭をめり込ませてくる。谷間を激しく擦り込んでくる。

すると熱感が電流に変わって、

「はあぁぁあああっ!?　ぃ、イク、イキますううっっ!!」

――ビクビクビクン!!　ビリッ、ビリッ！　ゾクゾクゾクウウウッ!!

胸の奥が爆ぜたような錯覚。乳房が溶けたような淫熱。背筋が冷えて脳裏が白み、瞳の奥が明滅した。

子宮にも電流が流れ込んで甘すぎる官能に打ち震える。股布からは蜜がしぶいてビチョッ、と破廉恥な水音がした。

と同時に、男たちも歯を食い縛り、

「くっ！　おお、い、イクぞぉ――っっ！」

――びゅくっ！　びゅくびゅくどびゅどびゅうっ!!

刺した亀頭から、顎下の亀頭から、勢いよく白濁を噴き上げてくる。若く柔らかい乳肉摩擦が牡性感を果てさせたのだ。

淫らな責めによがった王女は、粘り気の強い体液の洗礼をただ受け止めるしかない。

「あっ、あっあっ！　はあぁぁ、か、かかる……熱ぃ……！」
破れた胸元に、美顔に、容赦なく精液が降りかかる。三人もの男の射精で、彼女はあっという間に白化粧されてしまった。
顎には谷間から射精されてたっぷりと粘液が噴きかかる。淡い唇さえ白く汚れてまるでクリームを吐き出したかのよう。また柔乳は亀頭を刺されたまま射精されて、ハチミツと白濁の混じった斑模様になっていた。
「ククク。もうベタベタねフィオナ。ほんと、あのブタ野郎にお似合いのいやらしさだわ」
小気味よいとばかりに嗤うボンデージ少女に、もう睨む気力さえ湧かない豊満王女。
（あぁぁ……こ、これが、イク、ということ……？）
男たちが離れてもなお、呆けたように座り込んだまま。虚ろな瞳には、犯される悦びを知った牝の残り火がチラついた。
（わたく、し……胸を犯されて……こんなに気持ちよく……）
未だ実感は薄いものの、確かな快楽だけははっきりと刻み込まれている。
もう、認めざるを得ない。自分は乳房を嬲られて気持ちよかったのだ。最後など、進んで胸を波打たせていたほどだ。
「はぁ、はぁ……わ、わたくし……わたくしは……」
「ほぅら、やっぱりあなたは胸だけでイケる変態じゃない。あんなにヒィヒィ喘いで、みっともないったらなかったわ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!
キルタイムのアダルトコミック誌!
業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!
二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE
成年向け雑誌
今月の特集
責めアナル
KTC特製
スポーツタオル発売決定!
偶数月
17日発売
魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!
04 2013 APRIL
price 680yen
絶好調不思議Hコミック誌!
増ページ
特大号!
奇数月
12日発売
KTCといえば闘うヒロインアンソロ!
メガミクライシス
MEGAMI CRISIS
Vol.III
奇数月
下旬発売
忍アサギ3
Anime Lilith
コミック UNREAL アンリアル
メガミクライシス
MEGAMI CRISIS
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて!
キルタイム
検索
Click
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!